

魔法の medicine プロジェクト 活動報告書

報告者氏名：日置節子 所属：大阪府立寝屋川支援学校 記録日：2021年2月11日

キーワード： 画像や音声を使った相互コミュニケーションの拡大

【対象児の情報】

- ・学年 小学部1年
- ・障害名 知的障がい 5P マイナス症候群（染色体異常症候群の一つ）
- ・障害と困難の内容
 - ・現在のコミュニケーション手段（サインと発声）で、新しい相手とやりとりができるようになるためには、サインと発声を相手が理解しなければならない
 - ・サインと発声だけでは、同学年の友達との直接的なやりとりを広げていくことが難しい
 - ・サインと発声だけでは、学校の経験を家族に伝えたり、学校外の経験を友達や担任に伝えたりすることが難しい

【活動目的】

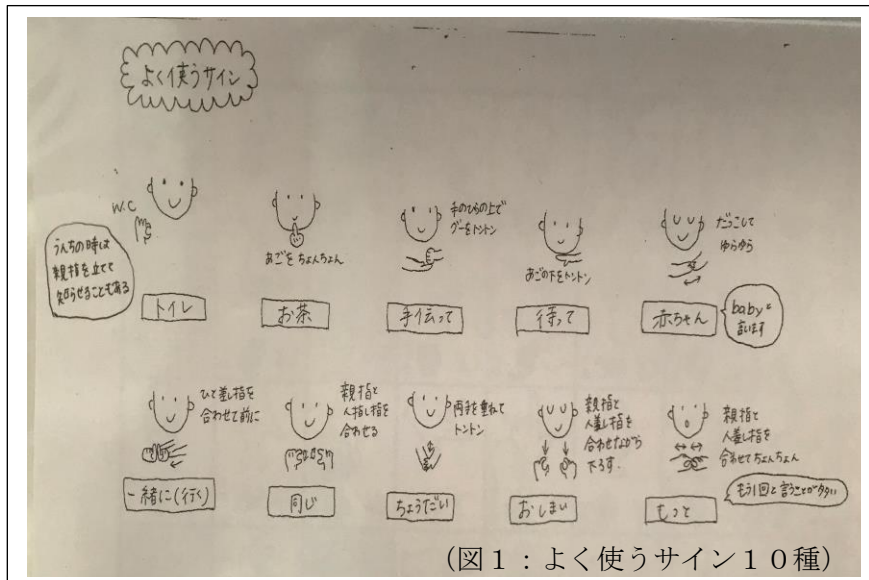
- ・当初のねらい
 - (1) 新しく出会った人、物、場所、活動内容などを覚える
 - (2) 獲得している言葉やサインを使って、担任とやりとりをする
 - (3) VOCA、画像などの新しいコミュニケーション手段を取り入れて、伝わる内容や相手を広げる
- ・実施期間 2020年4月～2021年2月
- ・実施者 日置節子
- ・実施者と対象児の関係 担任

【活動内容と対象児の変化】

＜これまでのサインと新しいサインを伝え合いの手段にするために＞

・対象児の事前の状況

入学時に保護者より、よく使う10種のサイン（図1）、獲得している約90種の他のマカトンサインが書かれたサインブックを引き継いだ。学校生活が始まる事で、獲得しているコミュニケーション手段を新しい担任と使えるようにしていくことが必要となった。担任がサインを覚えると、日常生活の中でよく使うサインは早い時期に伝え合えるようになった。時間や場面ごとに定番のやりとりもできた。



(図1：よく使うサイン10種)

(対象児と担任のやりとりの例)

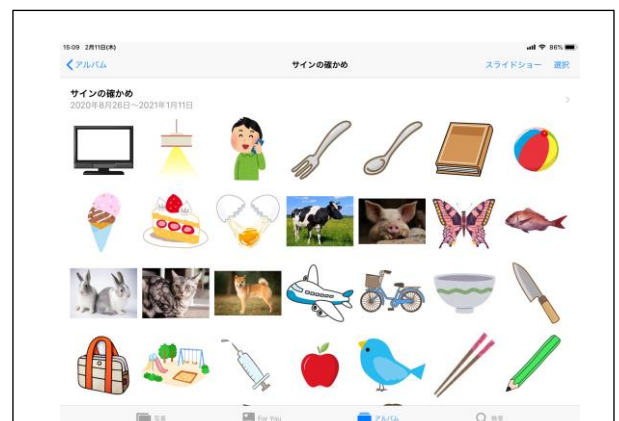
- ・お茶を飲もうとして水筒の蓋を開けられず、「せんせー」と言葉で呼んで「てつだって」のサイン
- ・登校時、担任と出会って「まま」「いっしょ (に来た)」のサイン。担任：「今日はママときたのね」

しかし、使う機会が少ないサインや担任に理解できないサインがあり、確かめ合いの機会が必要となった。また学校では「教科名」「よく使う物」「場所」などの新しい言葉やサインが使われるようになり、新たに対象児や保護者と理解し合うことが必要になった。

・活動の具体的内容

①これまでのサインを確かめ合う (写真機能を使って)

写真アプリに、引き継いだマカトンサインの内容を示す画像をストックした。対象児は「○○はどれ？」と尋ねられ、指をさしてイラストを正しく選択できた。「これは？」とサインで表すよう促すと、想起してサインを示すことができる内容と、担任がサインを見せて思い出す内容があった。(図2)



(図2：サインの確かめ用イラスト集)

②新しいサインをリストにする〔動画を使って〕

学校で使いはじめた新しいサインは、日常生活の中でも可能な限り音声と合わせて対象児に見せるようにした。また、対象児と保護者がサインを確かめやすくするために、新しいサインを音声で動画化した。(32種)夏休みや週末に、サインの動画を入れたiPadを家庭に持ち帰ってもらった。(図3)



(図3：新しいサインの動画集)

③サインを保護者と確かめ合う〔LINEを使って〕

本児が使うサインで、分かりにくい物について保護者と共有しあうために、連絡帳に加えて、LINEでもやりとりすることにした。

・対象児の事後の変化

獲得しているサインを確かめ合う機会を持つことで、使う機会がなかったサインを使って対象児自ら表現しようとするが増えた。サインを使う者同士(担任と本児)が、互いに、「このサインは使える」ということを確認するステップが大切と思われる。

学校で新しく使い始めたサインは、朝の会での予定説明時などに、担任のサインを動作模倣することが多くなった。サインを使うことが得意な友達と向かい合って、「〇〇(の勉強)、おわります」などと、「あいさつごっこ」をする様子も見られるようになった。(図4)



(図4：友達とあいさつごっこ)

保護者は、学校で新しく使い始めたサインの画像を丁寧に確認してくれた。また、家庭で新しいサインが使えるようになると、その度に連絡をくれた。担任と保護者で本児のサインを共有し合うことができた。

アプリ：DropTalk

<友達とのやりとりを広げるために>



・対象児の事前の状況

本児は、日常生活で聞き慣れた言葉はほぼ理解できていた。また、サイン、単語の発声、指さしなどで要求や思いを大人に伝えることができた。しかし友達は、本児の表現手段を理解しにくいようだった。本児自身が担任と友達とは関わり方を変えており、友達に関わる時には、顔を覗いたり手を握ったりするボディタッチを主な手段にしていた。友達と関わりたいという思いが強かったが、現在の手段では友達と直接的な伝え合いを広げていくことが難しいと感じられた。

そこで、友達にも伝わりやすいと思われるVOCAを使った音声表現を取り入れることにした。また、最初の音声表現の題材を、友達に伝わりやすく、本児にとって興味のあることでもある、「友達の名前(呼びかけ)」にした。

・活動の具体的内容

ステップ1：VOCAに親しみながら友達の名前を覚えよう(6月)

学年全員の友達の顔写真、名前表記、名前の音声が入ったキャンパスを作成した。キャンパスを繰り返しタップして操作し、録音された音声を聞き取ることを繰り返すと、ある友達の顔写真をタップしては、該当す

る友達を指さしして示す様子が見られるようになった。(図5-①・②)



(図5-①：友達の顔写真をタップ)



(図5-②：該当する友達を指さす)

ステップ2：名前呼びの当番をしてみよう (8月～)

週に1・2回程度、朝の会で「名前呼び」の当番活動を始めた。本児はVOCAを使うか、担任と一緒に名前を呼ぶかを尋ねられると、VOCAを使うことをサインで示した。初回は担任が横に付いて本児と友達を仲介しながら進めたが、少しずつ担任の手助けがなくても、キャンパスをタップしながら友達を呼んで、タッチを交わすという一連の活動ができるようになった。受け止める友達も、本児の名前呼びの方法が理解できてきて、大きな声で返事を返すことが増えた。

(図6)

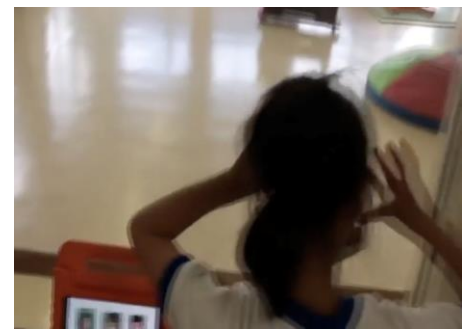


(図6：名前呼び当番にチャレンジ)

・対象児の事後の変化

休み時間にVOCAを担任が廊下に設置すると、気になる友達の顔写真をタップして音声を聴きながら、「○○ちゃん」と大きな声で友達を呼ぶ姿が見られるようになった。(図7)

DropTalkのアイコンを覚え、自分でキャンパスを開いて使うことができるようになった。生活の時間には、隣で遊んでいる友達を、VOCAの音声で呼び、気付いた友達が返事を返すというやりとりが日常的になった。一連する音声を使って名前を呼び合う活動の中で、VOCAを一つの手段として活用しようとする様子が見られる。



(図7：音声を真似て友達を呼ぶ)

<友達に今のコミュニケーション方法を知ってもらうために>

・対象児の事前の状況

本児は、登校時に毎回担任に手をさし出して挨拶に代わるタッチを求めた。友達に出会って最初に関わろうとする際にも、手をさし出してタッチを求めることが多かった。友達を相手にすると、大人に対するやりとり同様のコミュニケーションをすることは難しかったが、「タッチであいさつをする」というやりとりは、多くの友達に受け入れられやすいのではないかと考えた。またクラスには、本児と同じように、発声とサインを組み合わせて表現することが得意な児童が複数いた。クラスの中で共通に使うことができるサインが新しく見つかることで、共有し合うことができる内容や相手が広がると考えた。

・活動の具体的内容

①あいさつの方法を友達に知ってもらおう (11月) [動画を使って]

道徳の授業で「あいさつ」を取り上げた。複数の児童の挨拶の様子を動画で撮影し、挨拶の様子を互いに知るための教材にした。その中で、本児の「あいさつ」の動画は「タッチであいさつ」として紹介することにした。朝の担任とのタッチでの挨拶を動画で撮影し、友達に視聴してもらった。また授業の中で、数名の友達とタッチを交わして「タッチであいさつ」を実演した。

②得意なサインを友達に知ってもらおう (12月) [動画を使って]

別の回の道徳では、本児の得意なことを紹介することになった。「サインで色々なことをお話できます」という内容で、本児のサインを友達に動画で紹介した。合わせて、「パパ」「ママ」「デイサービスの名前」などのサインを友達の前で実際に披露し、複数の友達が本児のサインに合わせて動作の模倣をして返した。(図8)



(図8：友達にサインを披露)

・対象児の事後の変化

出会った友達にタッチを求めて関わろうとすることが続いている。中には差し出された手の意味を受け取れない友達もいるが、本児はものおじすることなくタッチを求めてやりとりをした。それに伴って、タッチを返す友達も徐々に増えていった。異学年の友達ともやりとりする様子が見られるようになった。

クラスで理解し合えるサインができた。本児特有のデイサービスの名前を示すサインは、クラスの友達もそれを覚えた。担任が「今日のデイサービスは？」と尋ねると、本児だけでなく友達も一緒にデイサービスの名前を言いながら同じサインを使って答え、クラスで定番のやりとりになった。

<学校や家庭での体験を動画(写真)で伝えよう>

・対象児の事前の状況

本児はこれまでも、学校の「授業の様子」や「出来事」を保護者にサインで伝えていたが、その内容は限られていた。例えば、「友達の名前」や「サインで示すことができない事柄」を、家庭で伝えることは難しかった。同じように、家庭での経験を、学校で担任や友達に伝えることにも難しさがあった。それぞれの場所で経験したことを、相手に伝わりやすい手段で、また相手にとっても解りやすい手段で伝え合えるようにするために、動画(写真)が活用できるのではないかと考えた。

・活動の具体的内容

ステップ1：友達と一緒に動画を見合おう (6月～)

本児を含むクラスの児童全員で、動画の視聴機会を持つようにした。終わりの会では、担任が撮影した自分や友達の姿が映った動画を見て、活動の内容を担任が様子言葉を言葉に出して聞かせたり、お互いに賞賛しあったりした。(図9)

朝の会や休み時間には、授業で使っている歌ビデオを視聴しながら、ダンスをしたり予定を確かめたりすることを続けた。対象児にとって他者と一緒に動画を見合うことが日常的なものとなった。また、動画のアイコンや操作を覚える機会になった。



(図9：友達と体育での様子を見合う)

*対象児は右奥

ステップ2：家や学校での経験をそれぞれの場で伝えよう

3・4週に1回程度の頻度で、週末に本児専用のiPadを家庭に持ち帰ってもらい、保護者に家庭での出来事を動画や写真に撮影してもらった。また、夏休みにもiPadを持ち帰ってもらい撮影をお願いした。(冬休みは急な臨時休校で持ち帰りができなかった)保護者とはiPadの持ち帰りが負担にならないように、無理のない範囲で撮影することを了承しあった。

同時に、学校で友達と視聴している学習に関わる動画や、友達と一緒に活動している動画もiPadに入れておき、本児と一緒に家庭で視聴してもらうようお願いをした。

・対象児の事後の変化

①家庭での様子

保護者からのコメントには、「自分でiPadを操作して画像を再生して見せていました。朝にはお父さんに、テレビ電話でおばあちゃんに見せていました。」「伝えられることが嬉しいようです。」との報告があった。

伝えられる手段に画像が加わったことで、本児が保護者に伝えられる内容が広がった。

別の日には、学校で取り組んでいるリトミックの歌ビデオを家庭でも再生してダンスを披露した。学校で取り組んでいることを実際に家庭で家族に向けてやって見せることができた。保護者からは「大興奮で見せてくれました。」とコメントをもらった。(図10)



(図10：家で動画を流してリトミックを披露する)

②学校での様子

家庭で撮影してもらった画像を学校で担任と見返すと、対象児は画像を見ながら大笑いし、他の担任を手招きして、「みてみて！」と画像を見せた。担任が画像について「〇〇したの?」「これは誰？」などと尋ねると、頷いたり、単語で答えたり、映った内容をサインで表現したりした。

休み時間には、クラスの友達に自分で再生した画像を見せる様子が何度も見られた。対象児は、じっと自分が映った画像を見る友達の横で一緒に画面を覗き込み、恥ずかしそうな表情になったり、笑ったりした。(図11)

「夏休みのできごと」という題材での発表場面では、友達の前に出て、ディスプレイされた写真について、「私、馬、乗る。」「(馬は)大きい」とサインを組み合わせながら発表することができた。友達が、対象児の発表に合わせるように「馬さん」「大きい」と話し、馬に乗った体験を友達と共有することができた。

(図12)



(図11：友達に休日の動画を見せる)



(図12：乗馬体験の発表)

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

画像（写真・動画）や音声を活用することが、友達、担任、保護者との相互のコミュニケーションを広げることに繋がったのではないかと。

・エビデンス

◎担任が、対象児やクラスの児童にサインを繰り返し見せることに加えて、動画、写真を学習のツールとしてたり、保護者とサインを共有したりすることが、対象児と、担任、友達、保護者との間で伝わるサインを増やした。（図13・図14）

対象児と担任が確かめたサイン

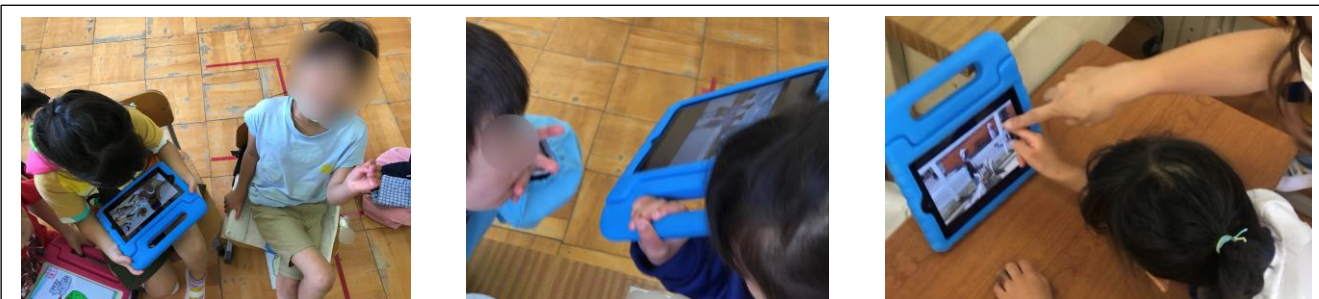
サインの内容	7月	12月
人の名称	お父さん お母さん 先生 赤ちゃん	
物の名称	パン お茶 アイスクリーム ばなな 魚 テレビ 電話 ウサギ 馬 牛 豚 犬 猫 花 本 ボール 鉛筆 ハサミ 時計 薬 かばん	電気 箸 飛行機 自転車 包丁 注射
気持ち	暑い 冷たい 寒い ごめんなさい	
状態・様子	良い だめ（禁止） さようなら いいえ 汚い 大きい 小さい 悲しい 強い 重い 赤 青 黄 終わり 痛い しんどい	失敗する 緑 黒 白
動作	寝る あげる（どうぞ）持つ 走る 遊ぶ 手伝う 聞く	食べる たつ 座る 仕事 をする

（図13）

クラスで共有できるようになったサイン（6月～2月）
iPad 動物（4種） クラス（1組から6組）あいさつ 昨日 明日 木曜日 金曜日 学校の授業名（7種） 学校の遊び（2種） 給食メニュー（3種）

（図14）

◎自分が気に入った画像を自分で再生して、クラスの友達やクラスを超えた友達、担任に繰り返し見せた。（図15）また学校での出来事を、DropTalkや画像を見せながら家の人に伝えた。（図16）



（図15：家での様子が写った動画を友達や担任に見せる）

おはあちゃん達にも iPad を見せて、この子はハスカー一緒、この子はひまわりハートで一緒など、いろいろ教えていました。

10月15日



iPad は大興奮で、いろいろとやって見せてくれました。夕べお友達と写っている写真を見て、『あせん?』ときくと、『ちかろ』『2くみ』『あせん』と DropTalk でしゃべり伝えてくれました。

11月24日

(図16：保護者からのコメント抜粋)

・その他のエピソード

<これが自分の iPad >

本児の iPad は青色のカバーを着け、他の iPad と見分けやすくした。担任は「青の iPad」という名で呼んで、本児も自分専用の iPad と認識し、「青」のサインをしながら当該の iPad を要求することが多かった。本児は繰り返し iPad に触れることでアイコンや操作方法を覚え、自分でタップして画像や音声を再生することができるようになった。

本児にとって、「これが自分の iPad」という認識は、自分に関わる事柄が入っている、家庭に持ち帰りができる、自分で操作できるといったパーソナルな機体であることから芽生えたと思われる。